

Symposium

放射線専門看護師に対する教育から見えてきたもの

松田 尚樹

Naoki MATSUDA

長崎大学先端生命科学研究支援センター 放射線生物・防護学分野

長崎大学では平成10年より大学病院看護師に対する放射線教育を年4回実施し、これまでに1,500人以上の看護師に対して放射線を語ってきた。これは放射線障害防止法に定められた「初めて管理区域に立ち入る前の教育訓練」を病院業務向けにアレンジした6時間コースである。しかし、このたった一度の教育で、放射線の知識習得を求めることは現実的ではない。基礎と現場応用の反復教育は必要不可欠であり、そのためには、放射線を理解し、咀嚼し、説明することのできる看護師自身による職場教育が理想的である。

医歯薬学総合研究科で養成する放射線専門看護師は、その教育の中心的存在となるものであり、こちらもその気構えで「基礎放射線学」を開講した。内容は、放射線、放射線生物学の基礎、放射線防護の基礎と実際を含むものとし、初年度の学生には講義と実習見学を組み合わせた。特別な事例として、JCOの事故時の派遣の際の業務も紹介した。2011年3月13日、緊急被ばく医療チーム先遣隊として長崎空港で合流したとき、彼らは開口一番「先生、JCOの話、また現実になりましたね」、そして向かった福島での彼らの活躍は凄まじい。直後に入ってきた2年目の学生には、のんびり講義をしている暇はなかった。リアルタイムに変化している放射線情報を生の教材として、課題を設定して情報の収集解析と資料作成を行い、その組み上げの中で基礎を講義するというスタイルとなった。なぜかNHKの若手女性記者も受講していた。学生は今や川内村で強く信頼され、記者の書く記事は安心して読んでいられる。3年目の学生は福島から来た。事故から1年が過ぎ、福島の現状が外からはどう見えているのか、健康影響の不確実性はよくわかっているがそれでも戻れない過去とどう向き合うか、など課題学習を進める中でこちらが逆に教えられることが多かった。そして4年目の学生は、放射線の基礎を身につけたうえで、被爆後の長崎復興における看護師の役割を再検証し、福島を理解し、その対比を試みようとしている。

私が教育の核として期待していた放射線専門看護師は、放射線災害と復興支援の現場ではその最前線を張る。彼らが現場で放射線の物理的、生物的、規制科学的理解に基づく正確な判断と発信を行うための具体的なスキルの習得を後押しし、レベルアップとアップデートを支援し、励まし続けることもまたわれわれの使命だと見えてきたところである。